

マス・マンスール (K. H. Mas Mansoer) の初期活動に関する研究  
A Study on the early activities of K. H. Mas Mansoer

土佐林 慶太 (早稲田大学)  
TOSABAYASHI Keita (Waseda University)

マス・マンスール (K. H. Mas Mansoer 1896-1946) は、ジャワ島東部のスラバヤに生まれ、20 世紀前半にインドネシア (1942 年まではオランダ領東インド) で活躍したウラマーである。幼少期から、父の元でイスラーム教育を受け、メッカやカイロへ留学し、インドネシア帰国後は、宗教、教育、政治分野など様々な団体で活動を行なった。特に、イスラーム改革主義を掲げるムハマディヤでは、1931 年東ジャワ地区委員長、1937 年第 4 代中央本部委員長などの要職を歴任した。そのため、マンスール研究においては、ムハマディヤ史の視点から分析されることが多く、同団体の全国的な支部拡大に重要な役割を果たした指導者と評価される。

一方で、マンスールはムハマディヤの枠組みを超えた活動においても、中心的な役割を果たしている。1926 年イスラーム世界会議のインドネシア代表団に選出されたのを皮切りに、1937 年には、インドネシア・ムスリムの団結を目指し、ミアイ (M.I.A.I) の結成を主導した。同組織には、20 以上のイスラーム団体が加盟し、オランダ植民地期におけるイスラームを旗印とする最大の大同団結となった。また、日本軍政期には、スカルノ等と共に、インドネシアを代表する 4 人の指導者 (Empat Serangkai) の一人に選出され、日本軍政に協力した。

本研究は、1920 年代までのマンスールの活動を検討することにより、オランダ植民地期末期から日本軍政期にかけて、彼がムスリム団結運動の指導者、さらには、インドネシア・イスラーム運動の「顔」として、ムスリムを代表する指導者となった背景を明らかにすることを目的とする。従来のマンスール研究は、上術したように、ムハマディヤ史の視点によるものが多く、ムハマディヤ参加以前の彼の活動は、十分に検討されていない。これらの問題を扱った文献もわずかには存在するが、それらは、情報の所在が不明瞭な伝記・評伝に限られている。本研究では、同時代に発行された定期刊行物を主な史料として、彼の活動の軌跡をたどり、後の時代に彼が先導した運動との連関を探ることを目指す。

(文献)

利光正文. 1990. 「東ジャワの初期ムハマディヤ運動に関する研究」『別府大学紀要』31 : 29-38.

Alfian. 1989. *Muhammadiyah: The Political Behavior of a Muslim Modernist Organization under Dutch Colonialism*. Yogyakarta: Gadjah Mada University Press.